

# 完成したものを見てくれ



## おとなの男

株式会社イナテックの本社4階はギャラリーとして解放されている。地元アーティストの作品を中心に周期的な展示を行うほか、画家を招いて小学生のアトリエ教室を開催することもある。そんな時、良ちゃん——同社代表取締役社長・稲垣良次は、一心にスケッチブックに向かう子どもたちのなかに、あの頃の自分の姿を見つけることがあるのだ。

「勉強ができるわけでもない、そうかといって運動が得意なわけでもない。まあ、鳴かず飛ばずっていうんですかね」

愛船JOKER IIの1/18模型の隣で、良ちゃんは笑った。ジョーカーには道化師だけでなく、冗談の分かるおとなの男性という意味合いがある。そこからつけた船名だった。

特別目立つところのなかった良ちゃんは絵を描くのが好きな少年だった。学校の図工の時間、他の生徒たちは落ち着かなく教室内を歩き回っているなか、彼だけは黙々と絵筆を進めていた。横槍を入れてくる同級生に向けてはこう言ったものだ。「完成したものを見てくれ」

そんな良ちゃんを、母・みよさんはアトリエ塾に通わせた。現在、自ら描くのは旅先の風景をハガキにデッサンするくらいになったけれど、絵は今も好きだ。少年の頃の思いが、

このイナガキ・コスミック・ギャラリーを'90年にオープンさせるに至った。

「切削加工はミクロンの緻密さが要求される仕事です。それに対して、芸術作品にはフアジーな部分がある。緻密さと曖昧さ、そのバランスを持つことが必要だと思うんです」ギャラリーに展示されている作品を見渡して良ちゃんが言った。

## 夢は世界を(?)

父・邦松さんは、良ちゃんが生まれるとすぐに、「跡取りが生まれた!」とあちこちにふれまわった。邦松さんが経営する稲垣鉄工株式会社は、井戸の汲み上げポンプのレバーを製造していた。「鍛冶屋と鉄工所の中間のような会社」は、幼い良ちゃんの遊び場でもあった。両親共に働く現場で、ヒモでつながれてよちよち歩く良ちゃんを、住み込みの職人らがあやしていた。

邦松さんは、跡取り息子に大きな鯉のぼりを買ってくれた。「それこそ身分不相応なくらいにでっかいのをね」

鯉のぼりが泳ぐ大空を見上げ、目立たなかった少年も、しだいに“世界”というものに夢を馳せるようになってゆく。

中学校に入学した良ちゃんは、軟式テニス部に入部した。なぜなら、テニスは世界に通用するスポーツだと考えたから。

株式会社イナテック / 代表取締役社長

# 稲垣 良次

いながき りょうじ





## 緻密さと曖昧さ、そのバランスが必要

顧問の先生の指導は厳しかった。とても手の届きそうにないボールだと思い見送ると、「走る前から諦めるな！ やって見なければわからないだろう!!」と怒鳴られた。この言葉は、今も良ちゃんの胸深くに刻まれている。夕闇が濃くなるまで練習し、ボールが見えなくなると、「音を聴いて追え!」と言われた。しかし3年間打ち込んで、はたと気がついた。軟式テニスは、今でこそソフトテニスと改称され、グローバルなスポーツとなったが、当時はせいぜいが日本とアジアの一部でプレーされているだけだった。

とほほ……な良ちゃんは、高校入学を機にサッカー部に入る決意をする。サッカーこそは国際的なスポーツだ。入試の時に、校庭にサッカーゴールがあるのも見ている。だが、その高校にサッカー部はなかった。

またしても、とほほ……な良ちゃんを数名の先輩が取り囲んだ。「おまえが稲垣か」「あの時は、なんで悪いこともしとらんのに、しばかれるのかなと思いました」

だが先輩らは、中学時代に地方大会に出場していた良ちゃんを、軟式テニス部に入るよう勧誘してきたのだ。

「そうやって勧誘するくらいだから、部員の数も少ないんですよ。おかげですぐに選手です」

高校時代の良ちゃんは、地区大会を勝ち抜き、県大会にも出場した。もう一つ気がついたことがある。練習で走ることが多かったせいか、校内のマラソン大会で上位に入った。「自分は、短距離よりも長距離向きだな」

と、良ちゃんは思った。  
**卒業年は大不況**

どこの大学に、というよりも東京か大阪に行きたかった。入試は大阪から先にはじまり、結果発表も先にある。それで、合格通知がきた近畿大学に進学することにした。経営工学を専攻したのは、家業を継ぐのに役立つだろうと思ったからだ。

初めての一人暮らしは楽しかった。反面、親のありがたみも痛感させられた。当時の下宿先には掃除機もなければ洗濯機もない。良ちゃんは慣れない自炊をし、春先の洗面器の水が冷たくて割り箸でつまんでパンツを洗った。部屋に帰っても寒かった。都会に出てきたばかりの良ちゃんは、入学時に渡された当面の生活費を洋服代で使い果たしてしまった。アイビー・ルック全盛だった。たちまち困窮し、実家に電話すると、「吹田インターまでタクシーで出て来い」と父に言われた。邦松さんはそこまで車を運転してやって来ると、良ちゃんに金だけ渡し、そのまま無言で引き返していった。

「せつかなものですよ」と良ちゃんは笑った後で、かすかに眼を潤ませた。「いや、初めての都会暮らしでおかしくなっていないか、顔つきを見に来てくれたんでしょね」

大学の4年間は瞬(またた)間に過ぎた。選択したゼミは、所属する学生が8人と少人数だったせいかまとまりがよく、皆で協力し合い卒業研究した。担当講師の羽石寛寿先生は、

自分より5つ年長なだけの兄貴のような存在で面倒見がよく、自宅に押しかけては酒食にありついた。

羽石先生には以前の事だが、イナテックの労務管理と賃金体系について指導を受けているし、8人の仲間とは、今年に1度は集まっている。

卒業年は不況で就職難だった。やっと面接までたどり着いた会社も、履歴書に家が自営業であることを記すと、「腰掛けか」と不合格になってしまう。「いっそのこと」と幹部社員に勧められ、稲垣鉄工への入社を決めた。家業は自動車部品製造に転換してから高度経済成長の時代と足並みをそろえて規模を広げていた。

良ちゃんは昼夜勤交替の現場で、鋼材を旋盤で粗引きする第1工程の作業に就いた。13キロもある鋼材を一日中抱えていると、足腰が痛くなる。そんな良ちゃんを癒してくれたのがヨットだった。仕事のほかに一生の趣味を持ちたい、と大学卒業とともに始めたヨットはレース競技に参加するまでにはまり込んだ。

3年間、現場で汗と油にまみれたのは、最前線の労務に就く人々の気持ちを知るうえで勉強になった。その後、工機部門の営業を1年経験した。「とにかく毎日お客のところへ足を運べ!」と先輩に言われ、実行した。営業先の会社で、設計している社員さんの横にへばりついていると、「おまえのところで

作れるか?」と、根負けしたように凶面を渡される。持ち帰ると、「こんなもん作れるか!」と職人に一度は突き返されるが、「しょうがねえな」と受けてもらえるまでねばる。社内に忙しければ、外注先を駆けずりまわった。「お客様、先輩、外注さん、色んな人に育ててもらったんだと思います」

ある日、営業の先輩に連れられて行った取引先のロビーで、一人の女子社員を紹介された。帰り際、「さっきの娘、どう?」と先輩にきかれた。それが妻の美奈子さんだった。良ちゃんは26歳で結婚した。

やがて、社の全体を見る立場になった良ちゃんだったが、自動車産業の発展とともに、「もうひっちゃかめっちゃかでした。作れども作れども追いつかないような感じで」

西尾市平坂町の本社の他に米津町に別工場があったが、そこも手一杯になり、現在の幡豆の地に工場を新築し、本社を移転した。山の上に土地を選んだのは、邦松さんに伊勢湾台風の脅威の記憶があったからだ。小学生だった良ちゃんも、雨戸を押さえながら自宅1階が浸水するのを呆然と眺めていたのをおぼえている。

### 本気

専務になった良ちゃんは、経営方針をめぐって邦松さんとことあるごとに対立した。家で言い争い、会社に来て口論になった。社長と専務という立場ではあったが、そこは

親子である。「社員にしてみれば、どちらについていいものか困るところです。これ以上、社員に迷惑をかけられないと思いましたね」

ついに良ちゃんは邦松さんに進言した。「僕にやらせてくれんか」当然聞き入れてもらえないだろうと思った邦松さんの口から返ってきたのは、「おし、ええぞ。やれや!」という言葉だった。

38歳で社長に就任した良ちゃんは、ここまで長い道のりを走ってきた。長距離を走るのは嫌いではない。だが、襷(たすき)を渡す時のことも考えるようになってきている。「あの時、親父は60歳だったんです。よく渡してくれたものですよ。あと3年で、親父が社長を退いた年齢になりますが、今の私ではとても渡せません。でも、その時期だけは決して誤ってほらないと思っています」

「06年、稲垣鉄工と工機部門のイナテックを合併し新生イナテックとしてスタート。今回の金融危機による不況は、「創業以来初めての苦境でした」と語る。「しかし、いい勉強にもなった。会社の弱い部分も見えましたし」

良ちゃんとしては、これからを見ていてほ

しいと言いたいところだろう。小学生の図工の時間に、「完成したのを見せてくれ」と級友らに宣言したように。

良ちゃんには、太平洋・大西洋・インド洋の三大洋いずれかをクルーザーで渡りたいという夢がある。「気の合った仲間たちと1ヵ月くらいかけてね」

その目標に向けて、体力と知力のトレーニングに日々怠りない。

「本気ですよ」良ちゃんの眼に輝きが宿った。

(取材・文=上野 歩)



①薄肉砂型鋳造品 ②アルミ総削り品  
③マグネシウム筐体品 ④チタン総削り品  
⑤⑥砂型鋳造ヒートシンク

### Company Profile

◆会社名 株式会社イナテック  
◆所在地 愛知県幡豆郡幡豆町大字鳥羽字大入 20-1  
◆TEL/FAX TEL: 0563-62-6388 (代)  
FAX: 0563-62-6221  
◆設立 1963年  
◆資本金 4,000万円  
◆従業員数 350人  
◆事業内容 各種試作品・小ロット品のモデリング、精密砂型鋳造、切削加工、量産部品の切削加工など。

エミダス会員番号: 75090

1. アルミ (ADC12 材の対応可)、マグネシウムの精密砂型鋳造
2. 同時5軸MCを使った総削り加工
3. 5軸加工のノウハウを提供する5軸テクニカルスクールの開催
4. 3D デジタイザーによるリバースエンジニアリング
- ◆得意&特異技術 ADC12 材を使って、薄肉アルミ製品を砂型鋳造で製作。
- ◆注文・製品に関するお問合せ 担当: 三島陽一郎 TEL: 0563-62-6873